

2022年10月16日(日)／説教者：國分美生

説教：「主の食卓を囲み」

聖書：マルコ福音書8:1～6、14:22～26

主の晩餐に関し、歴史的根拠や聖書的根拠はどこにあるのか、その意味や形式は歴史的にどのように移り変わっていったのか、そして、現代の教会共同体での実践と課題は何か、など、近年日本のみならず欧米のキリスト教諸派の間でも議論がなされるようになりました。

新約聖書には「ユーカリスト」(感謝)という言葉、あるいはその派生語が 55 か所出てきますが、紀元 2 世紀ころには教会共同体の中では、パンとぶどう液を用いた聖餐式の意味として「ユーカリスト」と言い表していたようです。新約聖書に描かれていることのものであるのは、イエスが、神に感謝の祈りと讃美を捧げ、そして一つのパンを裂き、それをみんなで分かち合うという物語です。歴史が下り、やがてカトリックがキリスト教の主流になり、組織化・権威化していく中で、「秘儀」…洗礼を受けた人だけが受けられる儀式とされていきました。ですがもともと主の晩餐はそのように重々しい厳かなイメージでとらえられてはいませんでした。

主の晩餐を考える時に、よく議論にあがるのは「誰がパンとぶどう液をいただくことができるのか」という問いです。いわゆる「オープンかクローズドか」という問題です。主の晩餐の仕方について決まりやマニュアルはないので、なぜ主の晩餐を行うのか、どのような意味があるのか、教会全体で考えて、それをもとにその教会のやり方を決めるということがふさわしいであろうと思われます。

わたしの元いた教会では 2 パターンの新しい主の晩餐の式文をみんなで作りました。タイプ A は、イエスとその生涯の中で多くの人と食事を共にしたこと、特に罪びとと呼ばれる人、差別されている人、貧しく、見捨てられ、社会の周縁に押しやられていた人々と食卓についたことを根拠として言葉を選びました。タイプ B は、イエスと弟子たちの最後の晩餐のあの場面を根拠としました。しかしながら弟子たちがイエスに選ばれしヒーローでは決してなかったという点を鑑みて「逃げていく弟子たちと知りながら、イエスはパンと杯を分け与えた」という言葉を入れました。イエスが憐れみによって与えてくださったということを、忘れないでいたいと思います。

私たち普天間教会も、コロナ禍をきっかけとして、主の晩餐の意味と意義をあらたに考えることになったでしょう。わたしたちはなぜ主の晩餐を行うのか、また、なにを大切にしながら行うのか等々、活発に意見を交わし合えるような群れでありたいと思います。(國分美生)